

## 価値形態論と貨幣起源：マルクス批判の反批判

福留，久大  
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2348696>

---

出版情報：経済学研究. 86 (2/3), pp.99-122, 2019-09-20. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

(研究ノート)

# 価値形態論と貨幣起源

— マルクス批判の反批判 —

福 留 久 大

- |                |                |
|----------------|----------------|
| (一) 問題の所在と課題限定 | (2) 著者のマルクス要約論 |
| (二) マルクスの価値形態論 | (3) 二歴史家の見解の紹介 |
| (1) 資本主義・商品・価値 | (4) 著者への形式的反批判 |
| (2) 価値形態論の課題設定 | (5) 二歴史家の見解の点検 |
| (3) 交換過程論の課題設定 | (6) 著者の引用とその原文 |
| (三) 貨幣起源論を巡る検討 | (7) 著者への内容的反批判 |
| (1) 著者のマルクス批判法 | (四) 一応の結論と残る課題 |

## (一) 問題の所在と課題限定

「『貨幣は、交換から、交換の中で発生するものであり、交換の産物である』という貨幣起源論——商品貨幣説は、メタリストに限らず、ほとんどの人々にとって疑い得ない歴史的事実として深く根を下ろしてしまっている。しかし、今日の歴史学や考古学から見れば、ドールトンやデイヴィスが明らかにしているように、商品交換に貨幣の起源を求めるこの常識はフィクションに過ぎない。貨幣は本来、商品交換を媒介する商品貨幣（価値物）として生まれたのではなかった。貨幣、計算貨幣の起源は、鑄貨の発行に2千年も先立ち展開されていた信用・債権債務関係にあった」（215～216頁）。すなわち、「貨幣、計算貨幣の起源は」「信用・債権債務関係に」あって、「商品交換を媒介する商品貨幣（価値物）として生まれたのではなかった」から、「商品交換に起源を求める」「商品貨幣説」は「フィクションに過ぎない」と主張される。

「商品交換から貨幣が商品貨幣（価値物）として生成すると考える限り、マルクスの価値形態論、交換過程論、貨幣論、さらには信用貨幣論の論理の枠組みから抜け出すことは難しい」（216頁）。つまり、マルクスの『資本論』の論理の枠組みは否定されるべきであり、それからの脱却が貨幣に関する経済学の踏むべき正当の道だ、と結論付けられる。

楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣』（2012年、文眞堂刊）<sup>1)</sup>において示された上記の見解は、著者の多年に

---

1) 楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣』（文眞堂、2012年刊）。同書からの引用に際しては引用部分の直後に頁数を記してある。

わたる英国金融史研究の重厚な成果を背景として提示されているだけに、大層重要な主張だと言わなければならない。しかしながら、上記の見解の内容が正しいとするならば、『資本論』を基軸として構築されてきたマルクス経済学の原理論は、その存在価値を根本的に毀損されることになる。上記の結論的主張が妥当性を有するか否か、その主張を支える論証部分の検討が避けられないことになるわけである。

そこで著者の論証が整合的か否かについて検討を試みるわけだが、著者が批判する「マルクスの価値形態論、交換過程論、貨幣論、さらには信用貨幣論」のうち、まず検討の対象を「マルクスの価値形態論、交換過程論、貨幣論」の三つの部分に限定したい。『資本論』第一巻の構成に即して言えば、「第一篇・商品と貨幣」のなかで「第一章・商品」「第三節・価値形態または交換価値」と「第二章・交換過程」と「第三章・貨幣または商品流通」、これら三部分が対応することになる。さらに、著者の「マルクスの価値形態論、交換過程論、貨幣論」批判は、『歴史の中の貨幣』のなかで「第5章・漂流するメタリズム貨幣論」「第4節・マルクスの貨幣起源論と信用貨幣論」と「第6章・貨幣の抽象性と債務性——貨幣の生成——」「第1節・ケインズ『古代通貨』草稿における貨幣起源論」、「第2節・ポランニー、ハインゾーン＝シュタイガー＆レイの貨幣生成論」、「第3節・貨幣の抽象性と債務性——クナップ、イネス貨幣論の復権——」において展開されている。そのように広範にわたる対象を一挙に検討に付することは大きな困難を伴い事柄を複雑にするだけである。

それゆえに、検討の対象を三つに分割して、「価値形態論と貨幣起源」と題する本稿では、「第5章・漂流するメタリズム貨幣論」「第4節・マルクスの貨幣起源論と信用貨幣論」のうち「貨幣起源論」に関わる部分を精査する。次回に「価値形態論と古代貨幣」と題して、「第6章・貨幣の抽象性と債務性——貨幣の生成——」「第1節・ケインズ『古代通貨』草稿における貨幣起源論」「第2節・ポランニー、ハインゾーン＝シュタイガー＆レイの貨幣生成論」における、ケインズ以外の論者の古代貨幣論を巡る著者の見解を検証する。最後に「価値形態論とケインズ」と題して、「第1節・ケインズ『古代通貨』草稿における貨幣起源論」におけるケインズの貨幣論を巡る著者の見解、「第3節・貨幣の抽象性と債務性——クナップ、イネス貨幣論の復権——」におけるクナップとイネスの貨幣論を巡る著者の見解を検討する。この「価値形態論とケインズ」稿には、『歴史の中の貨幣』のなかの「第4章・リアル・マネーとイマジナリー・マネー」における著者の「イマジナリー・マネー」論の当否の検討をも含めることを試みたい。

本稿「価値形態論と貨幣起源」は、そういう三部構成の「マルクス批判の反批判」の発端部分を担うことになる。この本稿は、後半の「貨幣起源論を巡る検討」を主要内容とするが、それに先行して前半に「マルクスの価値形態論」を配置する。

前半部分で『資本論』第一巻「第一篇・商品と貨幣」「第一章・商品」「第三節・価値形態または交換価値」と「第二章・交換過程」の主要部分の簡単な紹介を行う。著者のマルクス批判に応える前に、著者のマルクス批判の当否を判断するためには「マルクスの価値形態論、交換過程論」の前提を成す基礎概念と価値形態論・交換過程論の主要部分を紹介しておくことが必須の作業だと考えられる。「マルクスの価値形態論、交換過程論」は、マルクスに先行する古典学派の見解に対してマルクスの独自

性が最も明確に打ち出されている部分であって、それだけにそこに提示されている見解は完成したものとさえ、なお進化過程を辿っていたものと言えよう。そのために幾つかの弱点を含みもった見解でもある。そういう問題点の点検も欠かせない作業だと考えられる。しかしながら、その種の点検作業は次稿以下に譲って、本稿では著者のマルクス批判に応えるために必要な大筋の紹介に留める。

後半部分の「貨幣起源論を巡る検討」においては、「ドールトンやデイヴィスが明らかにしているように、商品交換に貨幣の起源を求める」ことは「フィクションに過ぎない」結果に終わると言う著者の主張の当否を検証するために、著者が引用する「ドールトンやデイヴィス」の見解を丹念に読解して、著者の主張との適合性の有無を検討する。結論を先取りして言えば適合性の欠如を論証することになる。

以下、『歴史の中の貨幣』の著者・楊枝嗣朗について「著者」の呼称を、本稿の筆者・福留久大について「筆者」の呼称を用いて、一切の敬称を省略する。

## (二) マルクスの価値形態論

### (1) 資本主義・商品・価値

マルクス『資本論』は、第一巻「第一篇・商品と貨幣」「第一章・商品」の冒頭に「第一節・商品の二要因、使用価値と価値（価値実体、価値量）」を置き、次のように開始される。「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現れ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現れる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」(S.49. 71頁)<sup>2)</sup>。

以上の文中に登場する基本概念、資本主義・商品・価値について、マルクスの言葉で解説を加えておく。①資本主義について。マルクスは、「第四章・貨幣の資本への転化」「第三節・労働力の売買」において、次のように述べている。「資本主義時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとって彼のもっている商品という形態をとっており、したがって彼の労働が賃労働という形態をとっているということである。他方、この瞬間からはじめて労働生産物の商品形態が一般化されるのである」(S.184. 299頁)。生産された生産物が商品となるというだけでなく、財貨の生産のための二要素（生産手段と労働力）そのものが商品形態をとることによって、商品によって商品が生産されることになる。そういう徹底した商品経済体制として資本主義が理解されている。②商品について。「第五章・労働過程と価値増殖過程」「第二節・価値増殖過程」において、「売ることを予定されている物品、すなわち商品（ein zum Verkauf bestimmter Artikel, ein Ware）」(S.201. 326頁)という表現が見出される。「財貨（goods）」は「使用目的の財貨（goods for use）」と「販売目的の財貨（goods for sale）」に二分される。資本主義の下では、「販売目的の財貨つまり商品（commodity; Ware）」が生産された後に販売と購買の

2) 『資本論』第一巻の原典としては、Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, (Karl Marx -Friedrich Engels Werke, Band 23. 1986). を用いる。引用に際しては、引用部分の末尾に (S.123) の形式で引用箇所を示す。日本語訳は、岡崎次郎訳、国民文庫版第1分冊の頁を (123頁) の形で示す。ただし、訳文は適宜変更されている場合がある。

過程を経て「使用目的の財貨」として消費される。③価値について。『資本論』においては、前述の如く冒頭部分に「価値」という言葉が登場するにも拘らず、その周辺に「価値」自体についての説明は容易には見出されない。漸く「第三章・貨幣または商品流通」「第三節・貨幣」「a項・蓄蔵貨幣」に至って、こういう文章に出会う。「使用価値としての商品は、ある特殊な欲求を満足させ、素材的な富の一つの特殊な要素を成している。ところが、商品の価値は、素材的な富のすべての要素に対するその商品の引力の程度を表わし、したがってその商品の所有者の社会的な富の大きさを表している」(S.147. 234頁)。ここから、商品の価値とは、すべての他の富の要素を交換に引き寄せる力・引力(attractive power; Attraktionskraft)つまり交換力・交換可能性を意味することが看取できる。そう判断して振り返ると、例えば「第一章・商品」「第三節・価値形態または交換価値」において「商品Aの価値は、質的には、商品Aとの商品Bの直接的交換可能性によって表現される。商品Aの価値は、量的には、商品Aの与えられた量との商品Bの一定量の交換可能性(exchangeability; Austauschbarkeit)によって表現される」(S.74; 115頁)と述べられている価値概念に納得が得られることになる。「価値そのもの」「価値自体」を、他の商品の一定量に対するその商品の交換可能性・交換力・引力と捉えるならば、「価値の実体」「価値実体」は、そういう力なり性質なりを作り出す源泉としての労働であり、「価値の形態」「価値形態」は、そういう力なり性質なりの具体的現れとしての価格であると理解される。

## (2) 価値形態論の課題設定

「第一章・商品」「第三節・価値形態または交換価値」の課題を、マルクスはこう述べる。「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことは何も知ってなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられることさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである」(S.62; 93-94頁)。

この引用の直前に、「価値形態」とは、商品パン1個は金60円である、商品洋服1着は金60,000円であるという風に、商品価値が貨幣によって価格として表現される形態であることを示した。そのことが、この引用文では、商品が「一つの共通な価値形態——貨幣形態」をもっていると表現されている。こういう当たり前の事実を改めて取り上げて、その貨幣形態は「諸商品の価値関係に含まれている価値表現」つまり「価値形態」の最も発展した完成形態と考えて、「価値形態または交換価値」を未発達の萌芽形態から完成形態である貨幣形態まで、「その最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡すること」が課題とされるのである。

これによって、第一に、商品が交換されその価値が実現されるための前提として、商品の価値が表現される仕組が解明されることになる。第二に「同時に貨幣の謎も消え去る」ことになる。「貨幣の謎」とは何か？商品を持っていても望みのままに商品売って貨幣を入手できるとは限らない。しか



し、貨幣を持っていれば、何時でも何処でもどのような商品でも購買できる。どうして貨幣が商品に対してそういう強大な力を持つに至ったか、それがここでいう「貨幣の謎」で、その解明が価値形態論のいま一つの課題である。その二つの課題を、「A）・単純な個別的偶然的価値形態（形態Ⅰ）」、「B）・全体的な展開された価値形態（形態Ⅱ）」、「C）・一般的価値形態（形態Ⅲ）」、「D）・貨幣形態（形態Ⅳ）」という諸形態の論理的展開の裡に果たして行くことが試みられる。

その展開の様相を、一番目の「単純な個別的偶然的価値形態」の分析について、見ることにする。ここでは、最も単純な価値表現形態が次の形で提示される。「x量の商品A = y量の商品B、またはx量の商品Aはy量の商品Bに値する。(20エレのリンネル = 1着の上着、または20エレのリンネルは1着の上着に値する)」(S.63; 94頁)。「ここでは二つの異種の商品AとB、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表しており、上着はこの価値表現の材料として役立つ。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表される。言い換えれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言い換えれば、その商品は等価形態にある」(S.63; 94-95頁)。

「20エレのリンネル = 1着の上着」という等式の成立の背後には、次のような状況が存在している。リンネル商品の所有者が1着の上着を必要として、その交換のために自己の所有するリンネルを20エレ提供するから交換に応じて欲しい、と上着商品の所有者に呼びかける。「商品所有者の交換欲求」が明示されているのは、「第二章・交換過程」においてである。ここでは、筆者はその論点を先取りしている。上着所有者は、その働きかけを受けて、提示された条件に満足できれば応諾し、不満であれば拒否する。そういう過程で、リンネル商品の価値が上着商品を材料として表現されることを示すものであって、商品同士の交換を示しているのではない。

両方の商品所有者の姿を透明人間化して、空中に浮かぶ両商品の動きだけを掬い取ったものが商品の価値形態だと言える。交換要請を受けた側の商品所有者には、交換の成否を決める力が与えられる。その動きを商品に即して見ると、次のように成る。「一商品A（リンネル）は、その価値を異種の商品B（上着）の使用価値で表現することで、商品Bそのものに一つの独特の価値形態、等価物という形態を押し付ける。リンネル商品はそれ自身の価値存在を顕わにしてくるのであるが、それは、上着がその物体形態とは違った価値形態をとることなしにリンネル商品に等しいとされることによってである。だから、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換され得るものだということによって、表現するのである。したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接交換可能性の形態である」(S.70; 106-107頁)。交換を求めたリンネル商品は上着商品を手に入れるとは限らないのに対して、交換を求められた上着商品は、望めば何時でもリンネル商品を手に入れる直接交換可能性を持ち得ることが明らかにされる。等価形態に置かれた商品の持つこの直接交換可能性（direct exchangeability; unmittelbare Austauschbarkeit）こそが、貨幣が商品に対して有する強大な力、何時でも何処でも任意の商品を買い得る力の萌芽形態なのである。

簡単な価値形態における以上のような動きが、以下のように総括される。「或る一つの商品の単純な

価値形態は、異種の一商品に対するその商品の価値関係のうちに、すなわち異種の一商品との交換関係のうちに、含まれている。商品Aの価値は、質的には、商品Aとの商品Bの直接交換可能性によって表現される。商品Aの価値は、量的には、商品Aの与えられた量との商品Bの一定量の交換可能性によって表現される。言い換えれば、一商品の価値は、それが『交換価値』として表示されることによって独立に表現される。この章（第一章——筆者）のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値であると言ったが、これは厳密に言えば間違いであった。商品は、使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特の現象形態、すなわち交換価値という現象形態を持つとき、そのあるがままのこのような二重物として現れるのである。商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値という形態を決して持たないのであり、常にただ第二の異種の一商品に対する価値関係または交換関係のなかでのみこの形態を持つのである」(S.74-75;115頁)。

このような価値形態の展開を、マルクス自身の言葉で、辿ってみる。まず簡単な価値形態から一般的価値形態まで（「形態Ⅰ」「形態Ⅱ」「形態Ⅲ」）について。「前の方の二つの形態（形態Ⅰおよび形態Ⅱ——筆者）では、商品の価値をただ一つの異種の商品によってであれ、その商品とは別の一連の多数の商品によってであれ、一商品ごとに表現する。どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれを成し遂げるのである。他の諸商品は、その商品に対して等価物という単に受動的な役割を演ずる。これに反して、一般的価値形態（形態Ⅲ——筆者）は、商品世界の共同事業としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同一等価物で表現するからに他ならない。こうして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粹に『社会的な定在』であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現れてくるのである」(S.80-81;125-126頁)。

次に、一般的価値形態から貨幣形態への移行について。「一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。だから、それはどの商品にでも付着することが出来る。或る商品が一般的等価形態（形態Ⅲ）にあるのは、ただ、それが他のすべての商品によって等価物として排除されるからであり、また排除される限りでのことである。そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とを勝ち得たのである。そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言い換えれば、貨幣として機能する。商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずるということが、その商品の独自の社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。このような特権的地位を」「ある一定の商品が歴史的に勝ち取った。すなわち、金である」(S.83-84;130-131頁)。「貨幣商品として機能している商品での、例えば金での、一商品たとえばリンネルの単純な相対的価値表現は、価格形態である。それゆえ、リンネルの『価格形態』は、20エレのリンネル＝2オンスの金、または、もし2ポンド・スターリングというのが金の鑄貨名であるならば、20エレのリンネ

ル = 2 ポンド・スターリング、である」(S.84 ; 132頁)。

商品は、価値と使用価値という対立する二要因を含んでいる。価値の面では、商品は他のあらゆる商品との交換を求める。ところが、使用価値の面では、商品種類ごとに異なることから、商品相互の交換は制約される。価値と使用価値の対立した二要因を内在させたままでは、商品は価値としても使用価値としても実現され得ない。この困難の克服の試みが、自己の欲する別種商品との交換要請を通じて、自己の商品の価値を相手商品の使用価値体で表現することである。この価値表現形態の展開のなかから「商品世界の共同事業」として、あらゆる商品に対して「直接交換可能性」を有する一般的等価物の形成が進行する。この一般的等価物の社会制度化したものが貨幣である。という次第で、商品の価値と使用価値の内的対立を克服するものとして貨幣の生成が説明されているわけで、論理的には「簡単な価値形態」から「貨幣形態」への順路を辿ることになるが、時間的には商品経済の登場と貨幣の形成は相伴うものとして同時に進行すると考えられる。

### (3) 交換過程論の課題設定

「第一章・商品」「第三節・価値形態または交換価値」においては、課題が明確に設定されていたのに対して、「第二章・交換過程」については、その課題が甚だしく把握しがたい。マルクスによる明確な課題提示が無いままに、「第三節・価値形態または交換価値」と相似た事項が論述されるので、価値形態論と交換過程論の関連ないし区別が曖昧になっているのである。

筆者は、手掛かりを次の文章に求められると考えている。「彼ら（商品所有者たち——筆者）が、自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた商品として関係させることが出来るのは、ただ自分たちの商品を、一般的等価物としての別の或る一つの商品に対立的に関係させることによるのみである。このことは、商品の分析が明らかにした。しかし、ただ社会的行為だけが、ある一定の商品を一般的等価物にすることが出来る」(S.101 ; 159頁)（下線は筆者）。下線部分の趣旨は、一般的等価物の形成の論理的必然性は価値形態論における商品分析によって明らかになったが、それを現実化するためには商品所有者たちの社会的行為が必要だという所にある。すなわち、価値形態論で抽象的論理的過程として展開したものを、交換過程論では、具体的歴史的過程によって補完しようと試みている。

そのことは、「第二章・交換過程」冒頭の次の文章に明らかである。ここでマルクスは「商品所有者 (der Warenbesitzer)」を登場させて、商品経済の事実在即した主体客体関係を明示し、事実在即した論理展開を可能にしている。「商品は、自分で市場に行くことは出来ないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。だから、われわれは商品の番人、商品所有者を捜さなければならない」(S.99 ; 155頁)。「商品に欠けている、商品体の具体的なものに対する感覚を、商品所有者は自分自身の五つ以上もの感覚で補うのである。彼の商品は、彼にとっては直接的価値を持っていない。もしそれを持っているなら、彼はその商品を市場に持って行かないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値を持っている。彼にとっては、それは直接にはただ交換価値の担い手であり、したがって交換手



段だという使用価値を持っているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値を持つ商品と引き換えに、手放そうとするのである。すべての商品は、その所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとっては使用価値である」(S.100 ; 157頁)。このような商品所有者の欲求に基づく交換要求に支えられて、第一章第三節の価値表現形態が機能し得ることになる。

そういう事情を考慮すると、商品からの貨幣の分化を解明する価値形態論の本流は、第一章「第三節・価値形態または交換価値」にあって、「第二章・交換過程」はそれを補完する副次的存在に留まると考えられる。「第二章・交換過程」には、商品からの貨幣の分化を巡る人物と事物について少なからず興味深い指摘が見出される。商品所有者の欲求の論点をはじめとして、それら興味深い指摘を「第三節・価値形態または交換価値」の論述に統合する試みが不可欠であると考えられる。

### (三) 貨幣起源論を巡る検討

#### (1) 著者のマルクス批判法

『貨幣は、交換から、交換の中で発生するものであり、交換の産物である』という貨幣起源論——商品貨幣説は「今日の歴史学や考古学から見れば、ドールトンやデイヴィスが明らかにしているように(中略——筆者)フィクションに過ぎない」(215~216頁)と、著者はマルクス批判を展開する。その批判が、最も直截な形で行われている個所が、第5章「漂流するメタリズム貨幣論」第4節「マルクスの貨幣起源論と信用貨幣論」である。そこで著者は、ドールトンとデイヴィスの貨幣起源論を引用して、マルクスの貨幣起源論に対置しその否定を試みる。

著者のマルクス否定の論理構造の大筋と焦点は、次の通り三段構えになっている。第一段目では、『資本論』第一巻「第二章・交換過程」からマルクスの貨幣起源論を示すものとして四つの文節が引用される。そのうえで、「諸共同体間の直接的商品交換の発展・拡大から、貨幣発生を遊牧民族にみるマルクスの理解」(142頁)という形にマルクスの貨幣起源論が要約される。第二段目では、G. ドールトンの論文 (George Dalton, “Barter”)<sup>3)</sup> と G. デイヴィスの著書 (Glyn Davies, *A History of Money: from Ancient Times to the Present Days*)<sup>4)</sup> から、彼らの貨幣起源論を構成する物々交換を巡る幾つかの文章が論拠として引用される。そのうえで、それらの引用文に含まれる貨幣起源論の核心が、「G. ドールトンは、貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (market exchange) が行われていたという歴史的段階などはまったく架空のものであって、歴史上は決して存在していなかったという」(142~143頁)と纏められる。第三段目において、「諸共同体間の直接的商品交換の発展・拡大から、貨幣発生を遊牧民族にみるマルクスの理解」と「貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換が行われていたという歴史的段階などはまったく架空のものであって、歴史上は決して存在していなかったという」二人の歴史

3) George Dalton, “Barter”, *Journal of Economic Issues*, Vol.16. No.1, 1982. 同論文からの引用に際しては、引用部分の直後に頁数を記してある。

4) Glyn Davies, *A History of Money: from Ancient Times to the Present Days*, University of Wales Press, 2002. 同書からの引用に際しては引用部分の直後に頁数を記してある。なお、著者の引用は1994年版から行われているが、引用部分に関する限りでは、内容的相違はないと考えられる。

家を代表するドールトンの見解が対置される。つまり、著者の読解では、マルクスは「直接的商品交換」を原因として「貨幣発生」を結果すると言うのに対して、二人の歴史家の側は「貨幣の生成」という結果をもたらすべき「直接的な商品交換」という原因が存在しないと言う、この対立する二組の見解を対置して、著者はマルクス見解（と著者が理解するもの）を誤解と認定し、二歴史家の見解（と著者が理解するもの）を正解と認定する。

こうした三段構成の著者のマルクス批判が妥当性を有するためには、最低でも、第一段目のマルクス見解の要約が正確であること、第二段目の二人の歴史家の見解の要約が的確であることが必要である。夫々の要約が正確でなく的確性を欠くときは、第三段目のマルクスの見解と歴史家の見解との対置が意味をなさないことに成る。

## (2) 著者のマルクス要約論

著者は、著書の141～142頁に、マルクスの貨幣起源論を構成するものとして『資本論』第一巻「第二章・交換過程」から以下の(W)(X)(Y)(Z)の四つの文節を引用している。

(W)「貨幣結晶は、相異なる種類の労働諸生産物がそこで相互に事実に等置され、したがってまた事実に諸商品に転形されるところの、交換過程の必然的産物である。交換の歴史的な拡大および深化は、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を發展させる。(中略——著者)かくして、労働諸生産物の諸商品への転形が行われるのと同じ度合で、商品の貨幣への転形が行われるのである」。(長谷部文雄訳、青木文庫、第一分冊、195頁)。(S.102. 160頁)。

(X)「ある使用対象が可能性から見て交換価値である第一様式は、非使用価値としての・その所有者の直接的欲望をこえる分量の使用価値としての・その使用対象の定在である。諸物は、絶対的に人間にとり外的なものであり、したがってまた譲渡されうるものである。この譲渡が相互的であるためには、人々はただ、黙って、かの譲渡されうる諸物の私的所有者として、また、まさにそれゆえに相互に独立する人格として、対応しあいさえすればよい。しかし、かかる相互的他者たる関係は、自然発生的共同体の諸成員にとっては(中略——著者)実存しない。商品交換は、諸共同体の終るところで、諸共同体が他者たる諸共同体・または他者たる諸共同体の諸構成員・と接触する点で、始まる。ところが、諸物がひとたび対外的共同生活において商品になるや否や、それらは反動的に、内部的共同生活においても商品となる」。(長谷部文雄訳、青木文庫、第一分冊、196頁)。(S.102. 160～161頁)。

(Y)「商品所有者たちが彼ら自身の財貨を他の種々の財貨と交換したり比較したりする交易は、種々の商品所有者たちの種々の商品が、それらの交易の内部で一個同一の第三の商品種類と交換され且つ諸価値として比較されることなしには、けっして生じない。かかる第三の商品は、種々なる他の諸商品にたいする等価となることによって、直接に(中略——著者)一般的または社会的な等価形態を受け取る。(中略——著者)だがそれは、商品交換の發展につれて、もっぱら特殊な商品種類にこびりつく、——または、貨幣形態に結晶する」。(長谷部文雄訳、青木文庫、第一分冊、197～198頁)。(S.103. 162頁)。

(Z)「貨幣形態は、内部的諸生産物の交換価値の事実上自然発生的な現象形態たる最も重要な外部

からの輸入諸財貨に付着するか、さもなければ、内部的な譲渡されうる財貨の主要要素たる、たとえば家畜のごとき使用対象に付着する。遊牧諸民族は最初に貨幣形態を発展させる、というわけは、彼らのすべての財産が動かせ得る・かくして直接に譲渡されうる・形態にあるからであり、また彼らの生活様式が彼らをして絶えず他者たる諸共同体と接触させ、かくして諸生産物の交換を行うに至らしめるからである」。 (長谷部文雄訳、青木文庫、第一分冊、198頁)。(S.103-104. 162~163頁)。

以上の引用部分に基づいて、マルクス見解を「諸共同体間の直接的商品交換の発展・拡大から貨幣発生を」(下線は筆者)説明するものと要約することは、当を得ているだろうか。特に、商品交換に、「諸共同体間の」と「直接的」との二重の限定を付す必要があるだろうか。本稿「(二)マルクスの価値形態論」において示した通り、『資本論』第一巻第一章「第三節・価値形態または交換価値」では、商品の価値表現の形態的側面に焦点を当てて、商品形態から貨幣形態が分化発生する論理の過程を探ることが主題であった。「第二章・交換過程」では、商品所有者の交換行動の内容的側面に着目して、商品が貨幣へと転形する必然性の解明が試みられた。そのいずれにおいても、「諸共同体間の直接的商品交換」が論述されることは無かったと考えられる。共同体に関しては、著者も引用する通り「商品交換は、諸共同体の終るところで、諸共同体が他者たる諸共同体・または他者たる諸共同体の諸構成員・と接触する点で、始まる」ということが重要な論点である。マルクスは、空間的には共同体の関係の外部において、時間的には共同体的関係の弛緩ないし解体に伴って、商品交換が始まると理解しているのであって、「諸共同体間の直接的商品交換」を強調することはなかったのである。こうしてみると、ここでのマルクス見解の要約としては、「諸共同体間の」と「直接的」との二重の限定をはずして、「商品交換の発展・拡大から貨幣発生を」説明するものと要約することが当を得ていると言えよう。その意味では、著者が別の個所で示している「商品と貨幣結晶への商品の二重化という貨幣発生と起源をめぐるマルクスの歴史的論理的認識」(143頁)という表現がより相応しいと考えられる。

### (3) 二歴史家の見解の紹介

著者は、「諸共同体間の直接的商品交換の発展・拡大から、貨幣発生を遊牧民族にみるマルクスの理解は、考古学や歴史学からは、まったく問題にもならない。G. ドールトンは、貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (market exchange) が行われていたという歴史的段階などは全く架空のものであって、歴史上は決して存在していなかったという」として、マルクスの貨幣起源に関わる見解を否定する。否定の根拠とされるのは、次のような G. ドールトンと G. デイヴィスの議論である。

第一に、G. ドールトンの論文 (George Dalton, “Barter”) に関連して、次のような主張が展開される。『』内がドールトンからの引用である。

『貨幣の起源に関する仮説的な説明』、すなわち『物々交換についての類推的な歴史は、貨幣なしに市場交換を遂行することが、如何に困難であるかを示すことによって、貨幣の有用性を強調するために発明された』に過ぎず、『広範な物々交換の状況を、時間と空間をもった現実世界の経済の中に、あたかも、かつて実際に存在していたかのごとく、自明のこのように仮定することは誤りである』。例

えば、アメリカ植民地時代の物々交換などは、『すでに存在していたヨーロッパ人のキャッシュや交易、植民地規則に大いに影響されて』おり、他方、物々交換でない貨幣なき財貨の交換や、いわゆる原始貨幣による財貨の取引は、『独特な社会的かつ政治的な性格をもっており、市場的交換と何らの関係もないのである』。かくして、『結論的に述べるならば、貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange) は、市場的交換の貨幣的手段の生成に先立つ取引の支配的様式という意味において、ひとつの発展段階を画するものではない。物々交換は過去においても現代の経済制度においても非常に広範に生ずるが、しかしながら、それは物々交換を行う者によって、常にマイナーな、散発的な、急場しのぎに用いられた取引に過ぎず、彼等は別のより重要な取引方法を知っているのである。』(143頁)。

第二に、G. デイヴィスの著書 (Glyn Davies, *A History of Money: from Ancient Times to the Present Days*) に論拠を求めて、次のような議論がなされる。『』内がデイヴィスからの引用である。

「大部の貨幣史を著した G. デイヴィスも、以下のように述べている。『物々交換の説明の大部分は、貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するためになされてきた。これらの説明は、物々交換の不便を過度に強調するだけでなく、このミスリーディングで狭隘な、間違った見解でもって貨幣発生を基礎づけ、他の要因を排除しがちであった——』。『(今日では)、物々交換が貨幣の起源や初期の発展における主な要因でないことは、専門家の多くの共通の認識である。』(143頁)。

以上のようなドールトンとデイヴィスの見解の核心部分を、著者は「直接的な商品交換 (market exchange) が行われていたという歴史的段階などはまったく架空のものであって、歴史上は決して存在していなかった」と要約した。この要約は妥当性を有するか、という問いに対して、形式的には、大過ない要約だと言えるかも知れない。

というのは、英語の 'barter' を通常の英和辞書的に「物々交換」と翻訳したうえで、ドールトンが、〈it is essential to confine the meaning of *barter* to moneyless market exchange〉「物々交換の意味を貨幣なき市場的交換に限定することは非常に重要である」(p.181) と述べていることを勘案すると、著者によるドールトンからの引用（「結論的に述べるならば、貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange) は、市場的交換の貨幣的手段の生成に先立つ取引の支配的様式という意味において、ひとつの発展段階を画するものではない」）における「貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange)」は「物々交換」と代替可能と考えられる。また著者による二人の歴史家の見解の要約部分（「貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (market exchange) が行われていたという歴史的段階などは全く架空のものであって、歴史上は決して存在していなかった」）における「直接的な商品交換 (market exchange)」も、貨幣を媒介としない「財貨 A」と「財貨 B」との直接交換という意味では、「物々交換」と代替可能と考えられる。

そのように考えると、ドールトンとデイヴィスからの引用における見解、例示すれば、〈広範な物々交換の状況は、現実世界の経済のなかには実際に存在していなかった〉、〈結論的に述べるならば、(moneyless market exchange) 貨幣なき市場的交換 (= 物々交換) は、市場的交換の貨幣的手段の生成



に先立つ取引の支配的様式という意味において、ひとつの発展段階を画するものではない)、〈物々交換が貨幣の起源や初期の発展における主な要因でないことは、専門家の多くの共通の認識である〉というような議論を、「貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (market exchange) (=物々交換) が行われていたという歴史的段階などは全く架空のものであって、歴史上は決して存在していなかった」と要約することは、大過なく可能なことと考えられる。

#### (4) 著者への形式的反批判

第一段目の著者によるマルクス見解の要約、第二段目のドールトンとデイヴィスの議論の要約、その二つの作業を経過して、第三段目の両方の要約の対置に至ると、著者のマルクス批判が整合性を欠いたもの、正鵠を射ていないものであることが明らかになる。

第一段目については、著者はマルクス見解を「諸共同体間の直接的な商品交換の発展・拡大から貨幣発生を」(142頁)説明するものと要約したが、「商品交換」に「諸共同体間の」と「直接的」との二重の限定を付すことは当を得ていなかった。ここでのマルクス見解は、二重の限定をはずして、「商品交換の発展・拡大から貨幣発生を」説明するものと要約することが妥当であった。「商品と貨幣結晶への商品の二重化という貨幣発生と起源をめぐるマルクスの歴史的論理的認識」(143頁)という著者の別の表現がより相応しいと考えられた。こうして、マルクスの貨幣起源を巡る見解を一点に凝縮すれば、商品形態から貨幣形態が分化発生するということになる。

第二段目で、マルクス見解に対置されたドールトンとデイヴィスの議論は、何を述べているか。著者による紹介の限りでは、二人の歴史家の見解は、「G. ドールトンは、貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (=貨幣なき市場的交換=物々交換) が行われていたという歴史的段階などは全く架空のものであって、歴史上は決して存在していなかったという」と要約された。デイヴィスの「物々交換が貨幣の起源や初期の発展における主な要因でないことは、専門家の多くの共通の認識である」という一文を重ねても良いだろう。という次第で、ドールトンとデイヴィスの見解に共通する部分を一点に纏めると、「物々交換から貨幣が発生したとは言えない」と要約される。

以上のような一方におけるマルクス見解の要約と、他方におけるドールトン+デイヴィスの議論の要約を、その内実において対比すると、こうなる。(A) マルクスは「商品からの貨幣の分化」を肯定する。(B) ドールトン+デイヴィスは「物々交換からの貨幣の発生」を否定する。このように対置すれば、一方におけるマルクス見解と、他方におけるドールトン+デイヴィスの見解が、出発点と終着点をそれぞれ異にしていることが判明する。出発点が、(A) は商品、(B) は物々交換、という風に相違する。終着点は、(A) (B) とともに貨幣だが、その貨幣への到達が (A) では肯定され、(B) では否定される。両者の言説は、その立脚点を異にしており、完全にすれ違っているのである。著者が「ドールトン+デイヴィス」の矢筒から抜き取って放った矢は、的を射ることに失敗したのである。マルクス見解を批判し否定したことにはならないのである。

このように、マルクス見解の要約とドールトン+デイヴィス見解の要約とを、その内実の即した形で対置すれば、後者が前者を否定していないことが明白になる。しかるに、両者の見解のすれ違



いを糊塗して、両者を同次元で対置して後者が前者を否定し得ると著者自ら錯覚するために、著者は或る苦心の工作に専念する。如何なる工作か。ドールトン+デイヴィスの見解については、「貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange) = 直接的な商品交換 (direct market exchange) = 物々交換 (barter)」、この三つの術語の連鎖が操作される。それによって、「貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換が行われていたという歴史的段階などはまったく架空のものであって、歴史上は決して存在していなかった」とする著者の主張、就中「直接的な商品交換 (= 物々交換) が行われていたという歴史的段階」は「存在していなかった」という主張が、近代以前の状況を対象としたものであって、ドールトンとデイヴィスの議論によって裏付けられるかの如き印象を生むべく工作された。他方で、マルクスの見解については、「諸共同体間の直接的な商品交換」という無理な纏め方、「商品交換」に「諸共同体間の」と「直接的」との二重の限定を付することによって、マルクスが対象とする「商品交換」が近代以前の諸社会における物々交換であるかの如き印象を与えるべく苦心が払われた。こうして、形の上では、マルクスの「直接的な商品交換」と二歴史家の「直接的な商品交換」とが、同次元において対置されて、そこから「貨幣発生」を説くマルクス見解が、先立つ「貨幣の生成」を認めない二人の歴史家の議論によって、批判され否定されることになる、それが著者のマルクス批判の構図である。

しかしながら、言語表現の形式の上では、成立可能に見える構図であっても、一步その内実に踏み込んで言語表現の内容を確かめるとき、その不整合が明白になることは、前述した通りである。著者のマルクス批判は的を射ることが出来なかったのである。

## (5) 二歴史家の見解の点検

著者が、英語の 'barter' を通例の如く「物々交換」と訳して、「貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange)、直接的な商品交換 (direct market exchange)、物々交換 (barter) の三語を、同じ意味の言葉として、ドールトンやデイヴィスの議論を理解していることは、前述した通りである。しかしながら、実際には、「物々交換」(barter) に関する定義がドールトンの場合は独特であって、通例に即したデイヴィスの定義と大きく異なっている。そういう事情にも拘わらず、著者がその相異を看過したために、著者の論述は著しい混乱に陥り、深刻な歪みをもたらすという残念な結果になっている。

「物々交換 (barter)」概念およびそれと密接に関連する「原始貨幣 (primitive money)」について、まずは、ドールトンの「物々交換 (barter)」概念を確認しておきたい。

論文“Barter”の最初の部分で、「物々交換 (barter)」概念が、次のように限定的に規定されている。〈第一に、英語では物々交換 (barter) という紛らわしい術語を、大きく異なる二つの取引を意味するものとして使用している。一つは、貨幣なき市場的交換 (現物による市場的交換) であり、二つは、あらゆる種類の貨幣なき交換 (進物の贈与、現物・用役による支払、ポトラッチ・クラ・モカの如き儀式的交換) である。曖昧さを避けるために、物々交換の意味を貨幣なき市場的交換に限定することが不可欠に重要である。あらゆる種類の貨幣なき交換を物々交換と呼ぶことは、非常に異なる種類の

諸取引を一まとめにして混乱を来すだけである。(First, in English we use the treacherous term *barter* to mean two very different kinds of transactions: moneyless market exchange (market exchange in kind), and moneyless exchange of *any* sort (gift-giving, prestations, ceremonial exchanges such as potlatch, kula, and moka). To avoid ambiguity, it is essential to confine the meaning of barter to moneyless market exchange. To call any sort of moneyless exchange barter is to confuse by lumping together very different sorts of transactions.) (p.181)。

この文章から判断すると、ドールトンの二大別区分の分岐点は、市場取引であるか否かによって、彼はあらゆる貨幣なき取引のうちで「貨幣なき市場取引」だけを“*barter*”と呼んで、その他贈答などの儀礼的な貨幣なき交換から峻別すると規定しているのである。この区別を明確にするために、筆者は、以後、ドールトンの意味における「物々交換 (*barter*)」については、訳語として「バーター (*barter*)」の表現を使用したいと考える。

「貨幣なき市場交換」について詳しい説明が続く。〈「貨幣による市場交換と同様に、現物による市場交換 (バーター) は、購買取引あるいは販売取引である。交換される財貨および取引の条件が第一次的に重要であって、交換に携わる人々の人間関係は副次的なものに過ぎない。バーター取引においては、双方ともに相手が提供する特定の財貨を欲しているのであって、財貨の交換に従事する人間は相互に全くの他人の関係にあると考えられる。交易の条件は、慣れ親しんで良く知っている需要と供給の力関係で決まるのである。この取引において双方ともに支払を最小にして受取を最大にすべく努めるのである。(Like market exchanges carried out with money, market exchanges in kind (*barter*) are also purchase or sale transactions. The goods exchanged and the terms of trade are of central importance, rather than the relationship between the parties exchanging. In barter transactions, each side wants the specific goods the other side offers, the persons exchanging goods may be total strangers to one another, and the terms of trade are determined by familiar supply and demand forces, both parties to the transaction seeking to economize or maximize, to receive the most for what they pay.) (p.181)〉。

このドールトンの「バーター」概念の特徴は、交換従事者が「相互に全くの他人の関係 (total strangers to one another) にある」こと、「交換に携わる人々の人間関係は副次的なものに過ぎない」ことに求められる。マルクスの所謂「相互的他者たる関係 (ein Verhältnis wechselseitiger Fremdheit)」(S.102, 161頁) に相当する。ということは、ドールトンの「バーター」取引には、濃密な人間関係を特徴とする近代以前の共同体社会での物資の配分や交換の取引はその大部分が含まれないこと意味する。

ドールトンは、原始貨幣 (primitive money) と原始価値物 (primitive valuables) の区別についても、独自の見解を示している。

ドールトンの理解する「原始貨幣 (primitive money)」について。〈「原始貨幣と呼ばれているものに少なくとも二つの種類の明確に異なる対象物が含まれている。一つは、通常小さな規模の市場での取引で行われる商業的交換に入ってくるものである。この原始貨幣素材は、そのままの姿でフランやドルの代用品の役を務める。第二次大戦中の野営施設で行われた捕虜の間の小取引で通貨として使わ

れた巻き煙草、植民地時代のアメリカで商業的交換の手段として用いられた封度単位の煙草が好例である。そういう物こそが、原始貨幣（あるいは商品貨幣）と呼ばれるべきである。その理由は、棒状の塩や巻物になった針金のように、われわれ自身の現金（硬貨および紙幣——筆者）と同様に、同一の姿形をしていて、持ち運びが出来て、分割可能であるから。さらに、何にも増して、それらの物が市場的交換において普通の購買および販売を促進するために用いられるからである」。(There are at least two quite different kinds of objects called primitive money. One kind does enter ordinary commercial exchanges, usually marketplace transactions of a petty sort. This primitive money-stuff *does* act as a crude proxy for francs or dollars, much as cigarettes were used as currency in the petty exchange in prisoner of war camps during the Second World War and pounds of tobacco as a medium of commercial exchange in colonial America. Such objects should be called primitive money (or commodity money) because, like our own cash, they are uniform in appearance, portable, and divisible (bars of salt, twists of wire); above all, because they are used to facilitate ordinary purchase and sale transactions in market exchange.) (p.184)。

ドールトンの理解する「原始価値物 (primitive valuables)」について。〈二つ目の種類は、一層理解が困難である。何故なら、それらの物自体についても、それらが使用される政治的及び社会的取引（花嫁の結納品、死者に対する補償品）についても、現代社会において良く似た類似物を見出せないからである。(中略——筆者) 僅かながら類似しているものを西欧社会で探すと、60年前にブロニスワフ・マリノフスキが指摘した、結婚指輪、軍人の勲章、冠を飾る宝石、運動競技の賞品、そして先祖伝来の家宝が挙げられる。私は、これらの品目の部分集合を原始貨幣ではなく原始価値物と呼ぶことにする、何故ならば、原始価値物は経済的性格ではなくて独特な社会的かつ政治的性格をもっており、原始価値物の主要な用途は、市場的交換と何らの関係もないからである。〉(It is the second sort which has been more difficult to understand because the objects themselves and the political and social transactions for which they are used (bridewealth, death compensation) have no close counterparts in modern societies: ..... These have a slight resemblance to wedding rings, military medals, crown jewels, sports trophies, and heirlooms in western societies, as Bronislaw Malinowski pointed out sixty years ago. I prefer to call this subset of items primitive valuables rather than primitive money, because they are peculiarly social and political rather than economic, their main usages having nothing to do with market exchange.) (p.184)。

ドールトンにあっては、「原始貨幣」と「原始価値物」の分岐点も、「市場的交換 (market exchange)」に関わるか否かという点にある。したがって、原始貨幣の例として挙げられた第二次大戦中の野営施設で捕虜間の小取引で使われた巻き煙草、植民地時代のアメリカで商業的交換に用いられた封度単位の煙草などによる取引は「バーター」取引に含まれることになる。「市場的交換」に関係ないものが、「原始価値物」と呼ばれて、それを用いた交換は勿論のこと、「バーター」取引には属さないのである。

「バーター (barter)」取引について独特の理解に立脚するドールトンは、五つの具体例を挙げて、バーター取引が選好される理由を説明している (pp.186-188)。(a) Baby-sitting cooperatives (b) An ethically flexible dentist (c) The foreign trade carried out in Hitler's Germany (d) An instance of barter described by

Malinowski for the Trobriand Islands (e) The most arcane instances of barter occurred in “silent trade” (also called “dumb barter”).

(a) 米国における両親の留守中の子守役の協同組織。通常は、ベビーシッターを雇って現金で謝礼を支払うのだが、現金収入の乏しい家庭の間では、相互の労働時間交換でベビーシッター役を務める。日本の農家の間で行われた「結い・手間替え」に相当する。

(b) 道徳に余り煩いことを言わない歯科医が、自宅の修理代を支払う代わりに、大工の歯の治療費で相殺する。相互に税金を節約する利得がある。

(c) ヒットラー・ドイツが、幾つかの友好国と輸出入の直接取引を行った。言うまでもなく、輸出によって外国為替を稼ぐ労を省くためであった。

(d) マリノフスキによって調査されたトロブリアンド諸島で見られたギムワリ (gimwali) の例。痩せた土地しか保有できず食糧自給が叶わない下賤民と蔑まれていた人々が、木工細工品を持ち込んで上級民のヤマノイモ (yam) と交換して貰う。非人格的で永続性の無い小規模取引である点で、上級民同士間の相互的贈与交換 (wasi, kula と呼ばれ「原始価値物」に分類される) と区別される。

(e) 「沈黙の取引」「無言のバーター取引」。海上を遠征してきた取引相手が海辺に交換希望の財貨を並べて沖合に後退する。土地住民が出てきて外来者の財貨を取り自分たちの財貨を置いて引き下がる。バーターが選好される理由は、外来者が潜在的に危険集団と見なされて直接対面を避ける所に在る。次の事例では「沈黙の取引」を選択する必要は無い。〈例えば古代の日本と中国の間の取引のように、交易当事者が同一種類の社会から訪問して持続的な関係を結んでいる場合には、バーター取引以外の交換方式が採用されることになる。〉(when the trading parties in sustained contact were from similar sorts of societies (early trade between Japan and China, for example), modes of exchange other than barter were employed.) (p.188)。

翻って、デイヴィスの理解における「物々交換 (barter)」および「原始貨幣 (primitive money)」は如何なる姿を呈しているか。“*A History of Money: from Ancient Times to the Present Days*”における「物々交換」概念は、次のように規定されている。

〈物々交換の歴史は、記録に残されている人間自体の歴史と同様に古いだけでなく、幾つかの点では、それより遥かに古いのである。相互の利益のための用役や物資の直接交換は植物・昆虫・動物に見られる共生的関係に本来的に備わっているものであるから、あれこれの形態の物々交換が人間そのものと同様に古い存在だとしても何ら驚くべきことではない。〉(The history of barter is as old, indeed in some respects very much older, than the recorded history of man himself. The direct exchange of services and resources for mutual advantage is intrinsic to the symbiotic relationships between plants, insects and animals, so that it should not be surprising that barter in some form or other is as old as man himself.) (p.9)。

デイヴィスは、物々交換について「共生的関係＝共同体関係」の下における「相互の利益のための用役や物資の直接交換」と理解しており、ドールトンの「バーター」取引論とは根本的に相異なることになる。



デイヴィスは言う。「人間の発展の実に大きな部分を通じて、必然的に物々交換が財貨と用役の交換の唯一の手段を構成することになった。したがって、相対的に古い時代から続いている貨幣と金融の歴史的な発展は、全体としての物々交換の研究とは、極めて僅かな程度でしか重なり合わないことになる。」(Throughout by far the greater part of man's development, barter necessarily constituted the sole means of exchanging goods and services. It follows from this that the historical development of money and finance from relatively ancient times onwards overlaps only to a small degree the study of barter as a whole.) (pp.9-10)。

デイヴィスの「物々交換」概念は、「貨幣と金融の歴史的な発展」に先立って「人間の発展の実に大きな部分を通じて」「財貨と用役の交換の唯一の手段」であった「物々交換」を含むものである。それゆえに、近代以前の共同体社会での物資の配分や交換の取引の大部分を除外するドールトンの「バーター」概念に比して、遙かに広大な世界を包含することになっている。

「原始貨幣 (primitive money)」についてのデイヴィスの理解もドールトンの定義より広いものとなっている。「ケンブリッジ大学の古銭学教授・P. グリールソンが、原始貨幣について、おそらく最も簡単で、最も直線的で、歴史理解に最も有効な定義を与えている。すなわち、硬貨および現代紙幣のような硬貨の派生物を省いたあらゆる貨幣、である。」(Perhaps the simplest, most straightforward and, for historical purposes certainly, the most useful definition of primitive money is that given by P. Grierson, Professor of Numismatics at Cambridge, viz., 'all money that is not coin or, like modern paper money, a derivative of coin') (p.23)。

次の文章を読むと、デイヴィスの場合には、ドールトンにあっては「原始価値物」として「原始貨幣」とは峻別されていたものが、先駆形態として原始貨幣に包含されていたことが窺える。「原始貨幣を生み出す最も一般的な非経済的諸力として、次の如き種類分けが可能だと思われる。花嫁の結納品および死者に対する補償品；装飾用品および儀礼用品；宗教および政治に関わる品物。」(The most common non-economic forces which gave rise to primitive money may be grouped together thus: bride-money and blood-money; ornamental and ceremonial; religious and political.) (p.24)。

実際に、デイヴィスは、「原始価値物」を「原始貨幣」に含めないドールトンに対して、「この見解は、余りに狭隘に過ぎていて、貨幣の発展を巡る永い進化の歴史の多くを無視しているように思われる」(This view seems to be far too narrow and rules out much of the long evolutionary story of monetary development.) (p.25)と、異論を提示している。

## (6) 著者の引用とその原文

著者は、ドールトンの「バーター (barter)」概念の特異性を看過して仕舞った。デイヴィスの「物々交換 (barter)」概念と同一論調にあるものと誤解して、共にマルクス批判の論拠の提供を求めたのである。しかしながら、マルクスについて何も特別の言及をしていないドールトンとデイヴィスに、加えて異なる論調にあるドールトンとデイヴィスに、共にマルクス批判の陣営入りを強制したところに、



著者の無理が存在していた。その無理が、著者の論述に如何なる歪みを結果することになったか、著者によるドールトンとデイヴィスの引用を原文と照合することで、明らかにしてみたい。

まずは、ドールトンの議論の五つの引用 (①②③④⑤) およびデイヴィスの議論の二つの引用 (⑥⑦) について、原文と照合しておく。日本文の『』内が著者による引用部分、英文の下線部分が著者による引用部分に対応している。

①『貨幣の起源に関する仮説的な説明』、すなわち『物々交換についての類推的な歴史は、貨幣なしに市場交換を遂行することが、如何に困難であるかを示すことによって、貨幣の有用性を強調するために発明された』に過ぎず、

(a “hypothetical explanation of the origins of money”) (Conjectural history about barter transactions is invented in order to point up the usefulness of money by showing how difficult it would be to carry out market transactions without money.) (p.182)。

②『広範な物々交換の状況を、時間と空間をもった現実世界の経済の中に、あたかも、かつて実際に存在していたかのごとく、自明のこのように仮定することは誤りである』。(What is wrong with the example is to postulate as ever having actually existed in real world economies of time and place a situation of widespread barter;) (p.183)。

③例えば、アメリカ植民地時代の物々交換などは、『すでに存在していたヨーロッパ人のキャッシュや交易、植民地規則に大いに影響されて』おり、(It is difficult to disentangle aboriginal valuables from those introduced from outside because much of the literature describes situations after European contact or colonial presence, when the usage of indigenous valuables was already seriously influenced by European cash, trade, or colonial rule.) (p.184)。

④他方、物々交換でない貨幣なき財貨の交換や、いわゆる原始貨幣による財貨の取引は、『独特な社会的かつ政治的な性格をもっており、市場的交換と何らの関係もないのである』。(I prefer to call this subset of items primitive valuables rather than primitive money, because they are peculiarly social and political rather than economic, their main usages having nothing to do with market exchange.) (p.184)。

⑤かくして、『結論的に述べるならば、貨幣なき市場的交換 (moneyless market exchange) は、市場的交換の貨幣的手段の生成に先立つ取引の支配的様式という意味において、ひとつの発展段階を画するものではない。物々交換は過去においても現代の経済制度においても非常に広範に生ずるが、しかしながら、それは物々交換を行う者によって、常にマイナーな、散発的な、急場しのぎに用いられた取引に過ぎず、彼等は別のより重要な取引方法を知っているのである』。(To conclude: Moneyless market exchange was not an evolutionary stage in the sense of a dominant mode of transaction preceding the arrival of monetary means of market exchange. Barter occurs very widely in past and present economic systems, but always as minor, infrequent, or emergency transactions employed for special reasons by barterers who know of alternative and more important ways of transacting.) (p.188)。

⑥大部の貨幣史を著した G. デイヴィスも、以下のように述べている。『物々交換の説明の大部分は、

貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するためになされてきた。これらの説明は、物々交換の不便を過度に強調するだけでなく、このミスリーディングで狭隘な、間違った見解でもって貨幣発生を基礎づけ、他の要因を排除しがちであった——』。(Consequently we know more about barter's complementary coexistence with money than we do about barter in those long, dark, moneyless ages of prehistory, and thus we tend to derive our knowledge of barter from the remaining shrinking moneyless communities of more modern times. It is principally from these latter backward communities rather than from mainstream of human progress that most accounts of barter have been taken to provide the basic examples typically occurring in modern textbooks on money. Little wonder then that these have tended not only to overstress the disadvantages of barter but have also tended to base the rise of money on the misleadingly narrow and mistaken view of the alleged disadvantages of barter to the exclusion of other factors, most of which were of very much greater importance than the alleged shortcomings of barter.) (p.10)。

⑦『(今日では)、物々交換が貨幣の起源や初期の発展における主な要因でないことは、専門家の多くの共通の認識である』。(On one thing the experts on primitive money all agree, and this vital agreement transcend their minor differences. Their common belief backed up by the overwhelming tangible evidence of actual types of primitive moneys from all over the world and from the archaeological, literary and linguistic evidence of the ancient world, is that barter was not the main factor in the origins and earliest developments of money.) (p.23)。

#### (7) 著者への内容的反批判

著者の引用における的確性の欠如は、③④の事例において、最も顕著である。著者の説明文と引用の原文と対比すれば、直ちに判明するように、相互の主語が異なっているからである。④について先に検討する。

④の原文では、まず「原始価値物 (primitive valuables)」と「原始貨幣 (primitive money)」が区別される、そのうえで「原始価値物」を主語として“because they are……”以下の文章が続いている。「原始価値物 (primitive valuables)」が複数名詞であるから、続く文章で“because they are……”とか“their main usages……”という風に、三人称複数代名詞が用いられることになる。したがって、原文の意味は、次の通りである。「私は、これらの品目の部分集合を原始貨幣 (primitive money) ではなく原始価値物 (primitive valuables) と呼ぶことにする、何故ならば、原始価値物 (primitive valuables) は経済的性格ではなくて独特な社会的かつ政治的性格をもっており、それらの主要な用途は、市場の交換と何らの関係もないからである」。

それに対して、著者の説明文においては、主語が二つある。一つは、「物々交換でない貨幣なき財貨の交換」であり、二つは、「いわゆる原始貨幣による財貨の取引」となっていて原始貨幣が主語を構成している。ひとまず後者について見ると、ドールトンの原文では、「原始貨幣」を排除して「原始価値物」を主語に据えているのに対して、著者の説明文では「原始貨幣」が主語になっているわけで、文章の意味が全く異なってくるのは当然のことである。どのように文章の意味が異なってくるか。前述

した通り、ドールトンの意味における原始貨幣は、「市場での取引で行われる商業的交換に入って」「市場的交換において購買および販売を促進するために用いられる」ものだから、「市場的交換と何らの関係もない」と言うのとは正反対に、「市場的交換」の不可欠の構成要素を成しているのである。「市場的交換と何らの関係もない」と言えるのは、ドールトンの意味における「原始価値物」であることが銘記されるべきである。

著者の説明文における二つの主語のうちの前者、つまり「物々交換でない貨幣なき財貨の交換」について言えば、「物々交換」を通常の意味（あるいはデイヴィスの意味）に解するならば、この表現は自己矛盾体であり成立不可能である。先に見た通り〈「用役や物資の直接交換」(the direct exchange of services and resources) (Davies, p.9)〉が通常の意味の物々交換であり、直接交換であることはとりもなおさず「貨幣なき財貨の交換」を意味する。それ故に「物々交換でない貨幣なき財貨の交換」とは、「物々交換でない物々交換」と言うに等しく、意味を成さないのである。この表現が意味を成すためには、ドールトンの意味における「バーター」つまり「貨幣なき市場的交換」と解するしかない。そのときには、「バーターでない貨幣なき財貨の交換」は、ドールトンの意味における「原始価値物」の交換を指す表現になり、「市場的交換と何らの関係もない」と言えることになる。

以上に見た通り、④は、著者の記述したままでは、意味不明の文章である。意味を成すためには、「バーターでない貨幣なき財貨の交換」つまり「原始価値物」の交換は『独特な社会的かつ政治的な性格をもっており、市場的交換と何らの関係もないのである』と、修正しなければならない。

ここに至ると、③の文章におけるドールトンの原文に対する著者の誤解も明白になる。原文は、「土着的価値物の使用がヨーロッパの現金貨幣や交易、植民地支配によって既に深刻な影響を受けている時には、多くの文献がヨーロッパの接触後の植民地的状況を叙述するので、原生的価値物と外部から導入された価値物とを区分けするのは容易ではない」と訳出される。その趣旨は、「原始価値物 (primitive valuables)」の一種としての「原生的価値物 (aboriginal valuables)」「土着的価値物 (indigenous valuables)」が主題であって、それらがヨーロッパの植民地支配などに影響されて外部から導入された価値物と見分け難くなっている、という所にある。それに対して、著者の説明文の主題は「アメリカ植民地時代の物々交換など」だから、形式面に限っても、原文からの逸脱は極めて大きい。「原始価値物」に関する記述を、それと大きく異なる「アメリカ植民地時代の物々交換など」に繋げるのは、正当な文章作法とは到底言えないのである。さらに、内容面に立ち入ると、「アメリカ植民地時代の物々交換など」についての言及が行われたのは、「原始貨幣 (primitive money)」の事例として〈「植民地時代のアメリカで商業的交換の手段として用いられた封度単位の煙草」(pounds of tobacco as a medium of commercial exchange in colonial America.) (p.184)〉が挙げられた際であった。このように内容面において見ると、主題は「原始貨幣」であり、それに対応する述語部分は「原始価値物」であるという不整合が生じているのである。

⑤の文章においても、著者の内部分裂は深刻で、このままの著者の翻訳では意味が通じないことになる。引用文中の「物々交換 (barter)」を通常の意味（あるいはデイヴィスの意味）に解するときには、「人間の発展の実に大きな部分を通じて、物々交換は必然的に財貨と用役の交換の唯一の手段で

あった」(Davies, p.9) のだから、決して「マイナーな、散発的な、急場しのぎの取引」とは言えない。そのように言えるためには、「物々交換 (barter)」概念をドールトンの「バーター (barter)」=「貨幣なき市場的交換」の意味に限定して使用しなければならない。ドールトンの「バーター」概念には、市場取引でない共同体社会での物資の配分や交換の関係は含まれていない。その大部分が共同体社会によって構成される前近代の世界において、共同体関係を除外すれば、「バーター」すなわち「貨幣なき市場的交換」が「取引の支配的様式という意味において、ひとつの発展段階を画するものではない」ことは、理の当然と言わねばならない。

ドールトンからの引用文①②とデイヴィスからの引用文⑥⑦を丹念に点検するとき、マルクス批判を企図した著者の狙いとは正反対に、ドールトンとデイヴィスの議論のなかに、マルクス見解に寄り添う趣旨を見出すことができる。まず①と⑥を点検する。

①『貨幣の起源に関する仮説的な説明』、すなわち『物々交換についての類推的な歴史は、貨幣なしに市場交換を遂行することが、如何に困難であるかを示すことによって、貨幣の有用性を強調するために発明された』(Dalton, p.182)。

⑥『物々交換の説明の大部分は、貨幣に関する現代の教科書に典型的に見られる基本的な事例を提供するためになされてきた』(Davies, p.10)。

①と⑥の原文において注目されるのは、例示される「仮説的な説明」「教科書的な説明」が商品と貨幣を巡る歴史の真実から逸脱しているとの批判が、ドールトンとデイヴィスによって成されていることである。ドールトンは、①の引用文に続けて「その仮説的な説明においては、証拠を提示することなしで、貨幣なき市場的取引 (barter) が当初から日常的に身近なものとして存在していたかのように想定されている。」(It is assumed (without evidence) that in the beginning there were ordinary and familiar market transactions without money (barter)) (p.182)と批判する。デイヴィスの場合には、⑥の原文について、著者の引用部分に先行する部分と後続する部分をも注視することが重要である。先行部分においてデイヴィスは「紋切型の経済書 (conventional economic writing)」の物々交換についての説明が、人類進歩の本流 (mainstream of human progress) を成す有史以前の貨幣なき時代からよりも、縮小しつつも現代まで生き残っている後進地域の貨幣なき社会により多く題材を求める傾向があることを批判する。著者の引用部分では、その結果として物々交換の不便を過大に強調する傾向が生ずること、物々交換の不便を強調する間違った見解と結び付けて貨幣の発生を説明する傾向があることが指摘される。それに後続する部分においてデイヴィスは、紋切型の説明から脱落するものについて、「そのほとんどは、物々交換の欠点とされるものより遥かに大きな重要性を有している」(most of which were of very much greater importance than the alleged shortcomings of barter.) (p.10)と強調している。

「物々交換の欠点とされるものより遥かに大きな重要性」とは如何なるものか。デイヴィスは、以下のように論述する。「最も単純な形の初期の物々交換について見られたより重要な改良は、多くの物品のなかで、他の物品に優先して一つか二つの特定の物品が選別される傾向がはじめて生じたことであ



る。その選別された物々交換物品が、部分的には交換の媒介物として働く性質のゆえに、相手に受け取られたのである。それでも、それらの物品が、交換当事者の欲求を満足させる第一目的のために使用されたのは、勿論のことである。」(One of the more important improvement over the simplest forms of early barter was first the tendency to select one or two particular items in preference to others so that the preferred barter items became partly accepted because of their qualities in acting as media of exchange although, of course, they still could be used for their primary purpose of directly satisfying the wants of the traders concerned.) (p.10)。

「物々交換取引から現代貨幣取引へと進んだ社会の事例も僅かながら見出される。しかし、ほとんどの場合、実際の道筋が、物々交換取引、物々交換と原始貨幣との混合取引、原始貨幣取引、原始貨幣と現代貨幣との混合取引、ほぼ排他的に現代貨幣による取引という論理的順路を辿ってきたのである。時折、以前の取引制度に戻りする事例もあったけれど。」(In some few instances communities appear to have gone straight from barter to modern money. However, in most instances the logical sequence (barter, barter plus primitive money, primitive money, primitive plus modern money, then modern money almost exclusively) has also been the actual path followed, but with occasional reversions to previous system.) (pp.10-11)。

当初の物々交換取引は「交換当事者の欲求を満足させる」物品を入手するために行われていた。取引が拡大し複雑になると、「交換当事者の欲求を満足させる」だけでなく、「交換の媒介物として働く性質」の物品が浮上してくる。貨幣類似の物品、あるいは萌芽形態の貨幣の登場と言えよう。そこから原始貨幣、そして現代貨幣への「論理的順路 (the logical sequence)」が開かれる。デイヴィスは、そう論述しているのである。マルクスの価値形態論は、人間の欲求を充足する性質としての使用価値の側面と他の財貨との交換を可能にする性質として価値の側面、この二要因を内包する商品の運動から、前者の側面が希薄化し後者の側面が強化し排他的に全面化したものとして貨幣の分化を説いている。マルクスや『資本論』について何ももの言及しないデイヴィスが、類似の論理的順路を探り出しているのは、極めて興味深いことだと言える。

同様にマルクス見解に親和的趣旨を、ドールトンの②の文章の原文を巡っても見出すことが可能である。②の引用の“*What is wrong with the example is*” (「その事例について誤っているのは」) に次の文章が続いている。〈「貨幣が使用されるに至る以前に、市場的交換が頻繁に行われ、量的に重要となり、相当に広い範囲の天然資源、労働、財貨、用役の取引を行ったということ；貨幣が登場する以前に、重要な市場部門が存在したということ」(that market exchanges ever were frequent, quantitatively important, or transacted an appreciable range of natural resources, labor, goods, or services before money came into use; that important market sectors existed before money existed.) (p.183)〉。“*What is wrong*”として、この二つの事項が追加されている。すなわち、この二つの事項は事実ではない、とドールトンは主張する。ということは、貨幣の登場を待って市場部門が重要性を増し、貨幣の使用と共に市場的交換が拡充することを意味する。こういうドールトンの見解は、市場経済＝商品経済の内部から貨幣の生成が見られるとするマルクス見解に寄り添うものであると言える。



最後に、⑦の文章に言及しておきたい。「物々交換が貨幣の起源や初期の発展における主要な要因でないことは、原始貨幣についての専門家の多くが共通に信じている所である」という文章は、必ずしも物々交換の重要性を否定したものではない。この文章は次の形で続いて行く。〈「ジェボンズに対して、アリストテレスにまで遡るジェボンズの先駆者に対して、主流派の伝統的経済学者を含むジェボンズの後継者に対して、明確な対照性が示されている。ジェボンズやその先駆者や後継者に共通する見解を典型的に体現しているのは、ジ・エコノミストの前編集長ジェフリー・クローサーである。彼は、その著書『貨幣論大綱』を‘貨幣の発明’と題する章で開始して、貨幣は‘疑いもなく一個の発明品であった。単純な物々交換から貨幣による計算に至るまでの境界を超えるには、人間の意識的な理性の力が必要だった’と主張している。〉(The contrast with Jevons, with his predecessors going back to Aristotle, and his followers who include the mainstream of conventional economists, is clear-cut. Typical of the latter approach is that of Geoffrey Crowther, formerly editor of *The Economist*, who, in his *Outline of Money*, begins with a chapter entitled the ‘Invention of money’ and insists that money ‘undoubtedly was an invention; it needed the conscious reasoning power of Man to make the step from simple barter to money-accounting’) (p.23)〉。

この文章から読み取れるのは、ジェボンズに代表される経済学者たちが、物々交換の不便性を克服するものとして人間が「理性の力」で貨幣を発明したとする見解を掲げることで、物々交換が貨幣発生「主要な要因」であるとする見方を広めたことである。この見方と対照的に、原始貨幣論の専門家の多くは、先述のデイヴィスの「論理的順序 (the logical sequence)」に窺えるような「歴史の力」を重視して、物々交換は貨幣発生「主要な要因」ではないとする見方、換言すれば、商品交換が貨幣発生「主要な要因」であるとする見方を示している。そういう事情を説明するのが、⑦の文章の含意である。

#### (四) 一応の結論と残る課題

①デイヴィスは「物々交換」について「用役や物資の直接交換」という通例の理解を示す。ドールトンは「貨幣なき市場的交換」(強調点は筆者)という限定的定義を採用する。通常「物々交換」と翻訳される‘barter’について、ドールトンとデイヴィスの二人の歴史家の理解が著しく異なるにもかかわらず、その事実を著者が看取できないことが、本稿の最大の論点である。

②商品交換から貨幣の分化発生を説くマルクス見解を批判するために、著者はドールトンとデイヴィスの議論を援用する。その際、著者は通常の「物々交換」概念にしたがって二歴史家の見解を、「貨幣の生成に先立って、直接的な商品交換 (=貨幣なき市場的交換 =物々交換) が行われていたという歴史的段階などは全く架空のものであって、歴史上は決して存在していなかったという」と要約する。その結果、〈(A) マルクスは「商品からの貨幣の分化」を肯定する。(B) ドールトン+デイヴィスは「物々交換からの貨幣の発生」を否定する〉というすれ違いの形になり、著者の議論は批評の体を成さないものに収束する。

③ドールトンの定義にしたがって「バーター」概念を理解すると、著者の二歴史家からの引用とそれに基づく議論は、著しく的確性と整合性を欠いていることが判明する。

④二歴史家の論述を虚心坦懐に読み解くとき、ドールトンは、〈貨幣の登場を待つて市場部門が重要性を増し、貨幣の使用と共に市場的交換が拡充する〉という形で、デイヴィスは〈「交換の媒介物として働く性質」を有する貨幣類似の物品あるいは萌芽形態の貨幣の登場から原始貨幣へ、そして現代貨幣への「論理的順路」が開かれる〉という形で、市場経済＝商品経済の内部から貨幣の生成が見られるとするマルクスの見解に親和的な議論を展開していることが明らかになる。マルクス見解の批判と否定の目的で著者は二歴史家の論述を援用したのだが、実際にはマルクス見解の肯定と擁護を結果したことが確認されるのである。

⑤次稿「価値形態論と古代貨幣」において、ケインズ以外の諸論者の古代貨幣論を巡る著者の見解を検証する。その前提として、本稿では「紹介」に留まった『資本論』「第一章第三節・価値形態または交換価値」について、そこに見受けられる弱点の修正と整備がなされなければならない。そのことは、「第二章・交換過程」および「第三章・貨幣または商品流通」についても同様である。

〔九州大学名誉教授〕